

「長野県植物目録」補遺 (1)

大塚孝一¹・星山耕一²・藤田淳一³・尾関雅章⁴・石田祐子⁴

Flora list of Nagano Prefecture, Japan : Supplement (1)

Koichi OTSUKA¹, Koichi HOSHIYAMA², Junichi FUJITA³,
Masaaki OZEKI⁴, Yuko ISHIDA⁴

要旨：「長野県植物目録 (2017 年)」(長野県植物目録編纂委員会編) 発刊後、新たに標本が確認され、また新たに生育が確認されたなどの植物を目録に追加される種類として記録した。追加される種類としてオオトヨグチイノデ、チョウセンミネバリ等 19 種類、目録から削除すべき種類としてヒメコウホネを載せた。コバノイシカグマ属の 1 種は新帰化植物、シナノコアツモリソウは 2017 年に発表された新分類群である。

I はじめに

長野県植物研究会発足 50 周年を記念して、平成 29 年 6 月に「長野県植物目録 (2017 年)」(長野県植物目録編纂委員会編) を発刊した。掲載された維管束植物の総数は、182 科 2868 種、150 亜種、609 変種、1 亜変種、602 品種、6 栽培品種、312 雑種、計 4548 分類群で、その内帰化あるいは帰化と考えられる種は 517 分類群、逸出あるいは逸出と考えられる種は 78 分類群で、合わせて 595 分類群である。発刊後も現地調査や標本調査を続けた結果、いくつかの追加すべき種類が確認できた。それらについて記述する。

II 「長野県植物目録 (2017 年)」に追加する種類

1 オオトヨグチイノデ

Polystichum ×kaimontanum Seriz. (オシダ科)
Fig.1

[標本] 下伊那郡大鹿村豊口山山麓 (小崎昭則 8036, 1992.8.4 TNS932733)

イワシロイノデとトヨグチイノデとの雑種。トヨグチイノデに似るが、葉が大きくソーラスは辺りよりであるが大きい。葉柄や中軸の鱗片も幅広く多い。山梨県で発見された他には知られていなかったが、1992 年に長野県大鹿村で採取された標本が国立科学博物館標本庫 TNS に収蔵されていて、海老原淳著「日本産シダ植物標準図鑑Ⅱ」(2017) の分布図に示されていた。全国で 2 例目と思われる。(大塚)

TNS: 国立科学博物館標本庫

2 キタダケメンマ

Dryopteris coreanomontana Nakai × *D. crassirhizoma* Nakai (オシダ科) Fig.2

[標本] 北安曇郡白馬村白馬尻 (藤本沙由美 760, 2006.9.8 TNS1209143)

カラフトメンマとオシダとの雑種。山梨県北岳で発見された。2006 年に長野県白馬村で採取された標本が国立科学博物館標本庫 TNS に収蔵されていて、海老原淳著「日本産シダ植物標準図鑑Ⅱ」(2017) の分布図に示されていた。白馬村産の標本はカラフトメンマに似ているが、北岳産の標本はややオシダに近い型である。全国で 2 か所知られる。(大塚)

3 コバノイシカグマ属の 1 種

Dennstaedtia sp. (コバノイシカグマ科) Fig.3

[標本] 辰野町小横川 (大塚孝一 s.n., 2017.8.18 NAC184865 Fig.3, 184866-184871)

北米原産の新帰化シダ植物。上野勝典・上野由貴枝氏が 2017 年に辰野町で発見した。全体の形態はイワヒメワラビに似るが、葉は細長い。根茎は横走し、胞子嚢群はコップ状でイワヒメワラビ属 *Hypolepis* ではなくコバノイシカグマ属 *Dennstaedtia* の種類。生育場所は林道沿いの法面で、法面への種子散布がされた際、混入したシダ胞子により生えたと考えられる。今回、未発表資料の掲載を許可していただいたが、詳しくは本会誌の上野氏の報告を参照。(大塚)

NAC: 長野県環境保全研究所植物標本庫

1 大塚孝一 〒380-0952 長野市宮沖 199-1

2 静岡市・3 松本市・4 長野県環境保全研究所

4 チョウセンミネバリ

Betula costata Trautv. (カバノキ科) Fig.4

[標本] 安曇野市三郷小倉黒沢 (藤田淳一 TCCN17-0184, 2017.6.13- NAC183636 Fig.4); 長野県大町市平大町ダム上流 (藤田淳一 TCCN17-259)

チョウセンミネバリ (マカンバ、ナガバノダケカンバ、ナガバノシラカンバ) の分類学的位置づけについては、それを独立種として扱う見解 (牧野・根元 1925, Tabata 1992, 大橋ほか 2016) と、ダケカンバの種内として扱う見解 (Koidzumi 1913, 大井 1953, 杉本 1978) があり、分類学的位置づけが揺れてきた種である。本種の形態的な特徴について、前述の文献による記載をまとめると、葉が三角状長卵形で側脈が 13-14 対以上と多く、葉は細長い。樹皮は灰白色でたやすく剥がれる。また、その立地は、冷温帯上部の川沿いや谷沿いの湿った立地であることが多い (Tabata 1992)。

長野県内では、美ヶ原産の標本があることが報告されていた (Tabata 1992) が、現地での確実な分布の確認がされていなかったため植物誌等への掲載は見送られてきた。しかし、2017 年に安曇野市や大町市、松本市など複数地点で確認がされた。(石田)

5 ヘンルーダ

Ruta graveolens L. (ミカン科) Fig.5

[標本] 松本市筑摩一丁目 (藤田淳一 TCCN17-0163, 2017.6.5 NAC183631)

ヨーロッパ原産の帰化植物。草丈は 20 ~ 50cm であるが、栽培下では 1m 近くになるという。葉は 2 回羽状複葉で対生し、初夏に黄色い花卉の集散花序をつける。全体にミカン科特有の芳香がある。園芸店等で「ルー」の商品名で販売され植栽されている。近年、乾燥した未舗装路や街路樹周辺に逸出、定着した個体が散見されるようになってきた。(藤田)

6 シナノコアツモリソウ

Cypripedium debile Rchb. f. *f. shinanoense* Suetsugu et Shitara (ラン科) Fig.6

[標本] 木曽郡上松町 (松井雅之 V6060259, 2016.6.4 KPM-NA0289106)

コアツモリソウの唇弁に暗紫色の脈を生じない新品種。木曽郡上松町をタイプ産地として、2017 年に植物研究雑誌第 92 巻第 2 号に発表された (Suetsugu and Shitara 2017)。(大塚)

KPM: 神奈川県立生命の星・地球博物館

7 カシワコナラ

Quercus × angustilepidota Nakai (カバノキ科) Fig.7

[標本] 諏訪市大字四賀 (藤田淳一 TCCN16-0309- NAC183833)

ミズナラとカシワの雑種。葉形は両種の中間型で、ミズナラよりも葉が大きく鋸歯が丸く、葉の裏面に星状毛が点在する。ミズナラとカシワの混生地にみられ、霧ヶ峰高原周辺ではミズナラ林内に混生している。(藤田)

8 イヌシカクイ

Eleocharis wichurae Boeck. f. *teres* (H.Hara) Ohwi (カヤツリグサ科) Fig.8

[標本] 大町市大町居谷里湿原下 (藤田淳一 TCCN17-0250- OAM4054)

湿生の多年生草本であるシカクイの品種。シカクイ同様地下茎を出さずに叢生する。品種関係のミツカドシカクイは明瞭な地下茎をとところどころ伸ばす。イヌシカクイの茎には不規則な稜が発達し、茎の断面は円に近い多角形となる点が、断面が常に四角形のシカクイ、常に三角形のミツカドシカクイとの大きな違いである。これらは品種関係であるが、植物体の色味も異なっていて容易に識別でき、判断に迷うものはほとんどない。(藤田)

OAM: 市立大町山岳博物館植物標本庫

9 サイコクヒメコウホネ

Nuphar saikokuensis Shiga et Kadono (スイレン科) Fig.9

[標本] 大町市平中綱湖 (藤田淳一 TCCN17-0229- OAM4053)

従来県内でヒメコウホネ *Nuphar subintegerrima* とされてきたものは、サイコクヒメコウホネと同定された。ヒメコウホネは、葉が円形で小さく、東海地方のみに生育する。サイコクヒメコウホネは、コウホネ、ヒメコウホネ、オグラコウホネを 3 種とする雑種群であり、地域によりその交雑の程度が異なるとされる。今回現地で確認したものは、コウホネによく似るが葉が丸みを帯び、皆浮葉となっていた。新潟大学の志賀隆氏に標本同定を依頼し、サイコクヒメコウホネの範疇になるとのコメントを頂いた。(藤田)

10 オニビシ

Trapa natans L. (ミソハギ科) Fig.10

[標本] 安曇野市明科中川手御宝田(藤田淳一 TCCN17-0460- NAC185836)

一年生の浮葉植物。果実が幅 5cm 以上に達し、明確な刺が 4 本出るものを指す。ヒシとの間に様々な中間型の果実が形成されることが報告され、その一型がコオニビシと呼ばれている。本種は、水鳥により短期間に長距離に種子運搬される可能性があるため、今後他所でも確認される可能性が高い。(藤田)

11 シンテッポウユリ (タカサゴユリ)

Lilium ×formolongo Hort. (ユリ科) Fig.11, 12.

[標本] 南木曾町吾妻(藤田淳一 TCCN17-0531- NAC185835 Fig.11)。タカサゴユリタイプ: 下伊那郡高森町山吹区小沼 alt.468m (堤久 2017.8.30 NAC185192 Fig. 12)

多年生の単子葉植物。本来テッポウユリとタカサゴユリとの雑種を指し、それぞれ両親の中間型以外にも様々な交雑品が報告される。現在県南部を中心に分布拡大し、花被片の内外とも純白で裂片がやや丸みを帯びる系統が確認されている。この系統が本当にテッポウユリとタカサゴユリの雑種か否かの疑義も残るが、タカサゴユリ(若しくはタカサゴユリに近いシンテッポウユリ)そのものとは花被片の構造や葉の幅が異なるため、神奈川県植物誌、高知県植物誌等にならい、シンテッポウユリとした。(藤田)

その一方、花被片の外側が紫褐色を帯び葉の幅もせまいタカサゴユリ *Lilium formosanum* A.Wallace に近いタイプもある。県南部ではこちらのタイプも多い。タカサゴユリかシンテッポウユリかの議論は、「日本帰化植物友の会通信 no.5 (2005)」等でされているが、環境省(2015)の「生態系被害防止外来種リスト」ではタカサゴユリを含めたシンテッポウユリとしていて、ここではシンテッポウユリ(タカサゴユリ)としてあつかった。(大塚)

12 ハイコウリンタンポポ

Pilosella officinarum F.Schultz et Schultz-Bip. (キク科) Fig.13

[標本] 松本市岡田 alt.680m (横内文人 s.n.,2014.5.25 SHIN69775, 69776- Fig.13)

ヨーロッパ原産の帰化植物。草丈は約 20cm、花茎は分枝しない、または 1 本の枝を出す。頭花径は約 2.5cm、舌状花黄色で最も外側の舌状花の背面には桃赤色の筋が入る。総苞には基部が黒く先端が腺になった腺毛、基部が黒く先端が細長く伸びた白長毛、星状毛が生える。葉は根生し、表面には

白長毛が散生し、裏面には白長毛が密生する。根際から匍枝を出し、匍枝は白長毛に覆われている(中野・本多 2013)。本種は北海道で 2011 年に確認され新産外来植物として報告された(持田 2012)ほか、石川県でも 2013 年に確認された(中野・本多 2013)。長野県では初確認となる。横内(2017)はこの標本に基づきキバナコウリンタンポポとして報告していた。(大塚)

なお、小谷村樹池高原では、“チシマタンポポ”として販売されている園芸植物がスキー場ゲレンデ周辺に逸出しており、樹池自然園のボランティアが駆除活動を実施している。この植物について標本(小谷村樹池 alt1550m, 小久保雅代)により確認したところ、本種と同一と考えられた。(尾関)

SHIN: 信州大学理学部植物標本庫(自然科学館)

13 フトエバラモンギク

Tragopogon dubius Scop. (キク科) Fig.14

[標本] 松本市高松 alt.598m (大塚孝一 s.n.2017.10.31 NAC185037,185038-Fig.14); 松本市新村(横内文人 s.n. 2006.6.5 NAC147454); 駒ヶ根市市場割(林芳人 s.n. 2006.5.29 NAC143214); 佐久市中込中央南 alt.690m (中山洸 s.n. 2013.6.20 NAC168331)

ヨーロッパ原産の越年生草本。バラモンギクに似るが頭花の柄は先で著しく太くなる。頭花は黄色で直径約 5cm、総苞は花後大きくなり、果時に長さ 3cm から 5cm になり、総苞片は 8 から 13 個(植村他 2010)。植村他(2010)には上田市と松本市で撮影された写真が載っている。今回松本市で確認したほか、NAC に藤田氏により再同定された標本が収蔵されている。(大塚)

14 アリアケスミレ

Viola betonicifolia Sm. var. *albescens* (Nakai) F.Maek. et T.Hashim. (スミレ科) Fig.15

[標本] 松本市大字蟻ヶ崎アルプス公園(藤田淳一 TCCN17-0043- NAC185838)

やや湿った立地に生育する多年生草本。スミレに似るが、花弁が白地であり、脈が紫色となるものが基本であるが、花弁に紫色が交じるものも存在し、個体により花色が異なる。腰原正己(2010)はすでに安曇野市明科の産を報告している。その他の安曇野市内でも生育が確認され、詳細は本研究会誌の松田貴子氏の報告を参照。(藤田)

15 メンヤダケ

Pseudosasa × pleioblastoides M. Kobay et Kashiwagi ex Muroi (イネ科) Fig.16

[標本] 高森町下市田松岡城址 (藤田淳一 TCCN17-0541- NAC185834)

ヤダケとメダケ属の一種との属間雑種と推定される (小林 2017)。ヤダケに酷似するが、葉がやや細く、ヤダケには全く形成されない肩毛が形成される。また、メダケ属のように桿が密生する特徴を有しており、ヤダケに似ているが桿が密生している場合は、肩毛の有無を確認する必要がある。ごく最近まで正式記載がされておらず知名度が低かったこともあり、県内でヤダケとして扱われて来たものの中に本種が含まれる可能性が高い。(藤田)

16 ニンニクガラシ

Alliaria petiolate (M. Bieb.) Cavara et Grande (アブラナ科) Fig.17

[標本] 飯綱町川上 alt.915m (中村千賀 2012.6.2 戸隠地質化石博物館 no.609)

ヨーロッパ、西～中央アジア、北アフリカ原産。2011 年 5 月に上水内郡飯綱町川上地区で生育するのが見つかった。この種は、国内では 2007 年に初めて北海道で帰化が確認され、長野県飯綱町での生育確認は、本州では初めてのものである (中村・中村 2014)。形態的・生態的特徴について、中村・中村 (2014) によると、越年性草本で、一年目は直径 2～12cm のハート型のロゼット葉を 3～4 枚出したままで冬を越し、次年の春に白い開出毛のある茎を 20～120cm 伸ばし、その先に直径 6～7mm のコンロンソウに似た白い花を多数つける。葉は長さ 3～8cm、幅 5～9cm の、粗い鋸歯を持った三角形で、3～10cm の葉柄を持ち互生する。飯綱町の生育地では、5 月下旬から開花が始まり、7 月上旬から果実が成熟した。本種は、河川沿いや湿った林床を生育地として好み、攪乱地でなくても分布を広げることから、植生への大きな影響も考えられるとされる。(大塚)

17 ミチバタナデシコ

Petrorhagia nanteuilii (Burnat) P.W.Ball et Heywood (ナデシコ科) Fig.18

[標本] 長野市北長池 350 朝陽職員宿舎 (石田祐子 2017.8.2 NAC184901 Fig.18); 長野市北長池エムウェーブ交差点 (石田祐子 2017.8.19 NAC184903); 千曲市戸倉 (永井茂富 2007.6.12

NAC146749); 千曲市大正橋下 alt.370m (中山湧 2010.7.02 NAC160466); 千曲市上山田 alt.400m (中山湧 2010.6.05 NAC160516); 千曲市大池 alt.820m (伊藤静夫 2011.6.24 NAC162378); 千曲市須坂 alt.370m (中山湧 2008.6.10 NAC168960); 千曲市上山田 alt.400m (中山湧 2012.6.14 NAC169098); 高森町万年橋南側 alt.448m (堤久 2016.7.17 NAC182810)

イヌコモチナデシコの学名は、これまで *Petrorhagia nanteuilii* があてられていたが、日本で最初にイヌコモチナデシコとして発表されたものは *P. dubia* に該当することがわかり、これまでイヌコモチナデシコとされていた *P. nanteuilii* に和名ミチバタナデシコの新称が与えられた (中村 2015a,b)。両種の違いは、イヌコモチナデシコの種子は洋なし型で円錐状突起があり、ミチバタナデシコの種子は盾型で細かいこぶ状突起があるとされる (中村 2015a)。この記載に基づき NAC のイヌコモチナデシコ標本を確認したところ、種子が充実している状態のものは、すべてミチバタナデシコのタイプであった。今後、各地の *Petrorhagia* 属の再同定が必要であろう。(石田)

18 ノランジン (セリ科)

Daucus carota L. Fig.19

[標本] 塩尻市小坂田公園 alt.800m (横内文人 2013.7.7 SHIN69768)

西アジアから地中海地域原産の越年生または 1 年生草本。世界の温帯に広く帰化している。野菜のニンジンの野生種で、根が肥大しない。茎葉や花の形態はニンジンと特に変わりはない (清水他 2001)。他に塩尻市小坂田公園 (SHIN 69750)、安曇野市明科 (SHIN69769, 69770) の標本がある。本種と次のムラサキウンランについては、「長野県植物誌補遺 (16)」で記録された種類のうち、本目録に追加されるべき植物として、標本確認がされたものである。(大塚)

19 ムラサキウンラン (オオバコ科)

Linaria bipartite (Vent) Willd Fig.20

[標本] 安曇野市穂高牧 alt.700m (飯沼冬彦 2013.7.1 SHIN69730)

北アフリカ、イベリア半島南部原産の 1 年生草本。茎は直立し、10cm から 30cm。花冠は紅紫から黄色、下唇は淡黄色、喉部は桃色。花期は 7 月から 8 月 (植村他 2010)。他に松本市四賀 (SHIN69882)、

朝日村中大池 (SHIN69872) の標本がある。(大塚)

III 「長野県植物目録 (2017 年)」から削除する種類

1 ヒメコウホネ

Nuphar subintegerrima: 従来県内でヒメコウホネとされた種は、サイコクヒメコウホネ *Nuphar saikokuensis* と同定された。(藤田)

謝 辞

上野勝典氏にはコバノイシカグマ属の1種について未発表資料の掲載をお許しいただいた。また、神奈川県立生命の星・地球博物館 (KPM) の大西亘氏にはシナノコアツモリソウの標本画像の入手・掲載にご協力いただいた。市立大町山岳博物館 (OAM) の千葉悟志氏には寄贈したイヌシカクイ及びサイコクヒメコウホネ標本画像を、戸隠地質化石博物館の中村千賀氏にはニンニクガラシの標本画像を提供していただいた。新潟大学の志賀隆氏にはサイコクヒメコウホネ標本の同定をいただいた。筑波大学の設楽拓人氏にはチョウセンミネバリ等の分布情報等を教示いただいた。国立科学博物館 (TNS) の海老原淳氏、信州大学理学部自然科学館 (SHIN) の佐藤利幸教授には標本閲覧の許可をいただいた。記して感謝いたします。

引用文献

- 角野康郎 (2014) 日本の水草, 文一総合出版, 東京.
- 環境省自然保護局 (2015) 生態系被害防止外来種リスト: <https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html> (2017 年 10 月確認).
- Koidzumi, G. (1913) *Spicilegium Betulacearum Japonicarum novarum vel minus cognitarum*, 植物学雑誌 27 (319): 143-149.
- 腰原正己 (2010) 中信地域のスマレ属の分布について, 塩尻市立自然博物館紀要 No.12: 14-25.
- 小林幹夫 (2017) 原色植物分類図鑑 日本のタケ亜科植物, 北隆館.
- 牧野富太郎 (2000) 新訂牧野新日本植物図鑑, 小林幹雄・大場秀章・西田誠 新訂編集, 北隆館, 東京.
- 牧野富太郎・根元莞爾 (1925) 日本植物総覧, 日本植物総覧刊行会, 東京.
- 持田誠 (2012) 帯広市新産外来種ハイコウリタ
ンポポ *Hieracium pilosella* L., 帯広百年記念館紀要 第 30 号: 11-14.
- 長野県植物目録編纂委員会 (2017) 長野県植物目録 (2017 年版) 256pp., 長野県植物目録編纂委員会
- 中野真理子・本多郁夫 (2013) 石川県新産キク科外来種キバナコウリタンポポ *Pilosella caespitosa* (Dumort.) P.D.Sell et C.West. とハイコウリタンポポ *Pilosella officinarum* F. Schultz & Schultz-Bip., 石川県立自然史資料館研究報告 第 3 号: 11-14.
- 中村功 (2015a) イヌコモチナデシコの正しい学名, 北九州市立自然史・歴史博物館友の会誌「わたしたちの自然史」132: 1-5.
- 中村功 (2015b) ミチバタナデシコ (新称), 北九州市立自然史・歴史博物館友の会誌「わたしたちの自然史」132: 6-7.
- 中村千賀・中村匡男 (2014) 長野県におけるニンニクガラシ *Alliaria petiolate* (アブラナ科) の帰化, 植物地理・分類研究 62: 23-27.
- 大井次三郎 (1953) 日本植物誌, 至文堂, 東京.
- 大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩司 (2016) 改訂新版日本の野生植物 3. 平凡社, 東京.
- 清水炬宏・森田弘彦・廣田伸七 (2001) 日本帰化植物写真図鑑, 554pp. 全国農村教育協会, 東京.
- 清水建美編 (1997) 長野県植物誌, 信濃毎日新聞社, 長野.
- 清水建美編 (2017) 「長野県植物誌」補遺 (16), 長野県植物研究会誌 50: 219-220.
- Suetsugu, K and T. Shitara (2017) A New Color Variant of the Slipper Orchid *Cypripedium debile*, J. Jpn. Bot. 92(2): 119-122.
- 杉本順一 (1978) 増補改訂新日本樹木総検索誌, 井上書店, 東京.
- Tabata, Hideo (1992) The union of *Betula costata* Trautv. and *B. nikoensis* Koidz., Acta Phytotax. Geobot. 43 (2): 125-134.
- 植村修二・勝山輝男・清水炬宏・水田光雄・森田弘彦・廣田伸七・池原直樹 (2010) 日本帰化植物写真図鑑第 2 巻, 全国農村教育協会, 東京.
- 横内文人 (2017) キバナコウリタンポポ, 清水建美編「長野県植物誌」補遺 (16), 長野県植物研究会誌 50: 220.

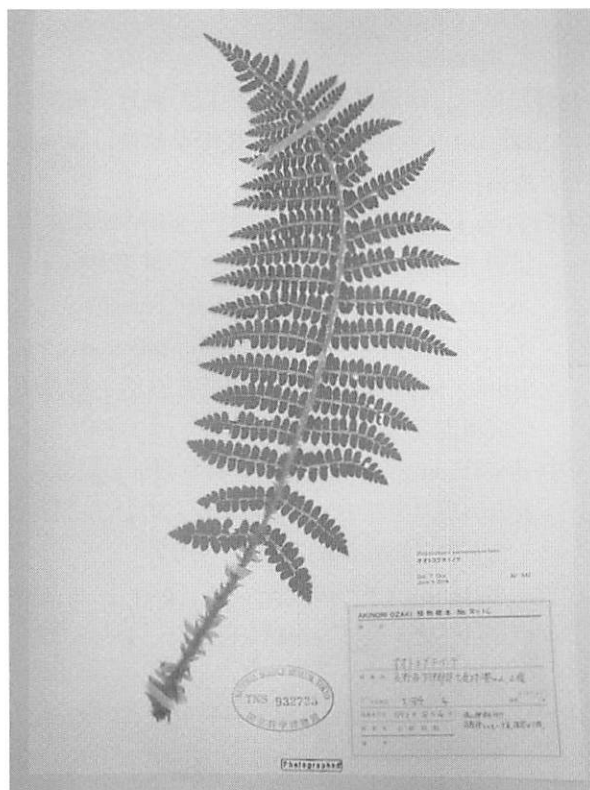


Fig.1 オオトヨグチイノデ
Polystichum × *kaimontanum*



Fig.2 キタダケメンマ
Dryopteris coreanomontana Nakai
× *D. crassirhizoma*



Fig.3 コバノイシカグマ属の1種
Dennstaedtia sp.



Fig.4 チョウセンミネバリ
Betula costata Trautv.



Fig.5 ヘンルーダ
Ruta graveolens L.



Fig.6 シナノコアツモリソウ
Cypripedium debile f. *shinanoense*



Fig.7 カシワコナラ
Quercus × angustilepidota

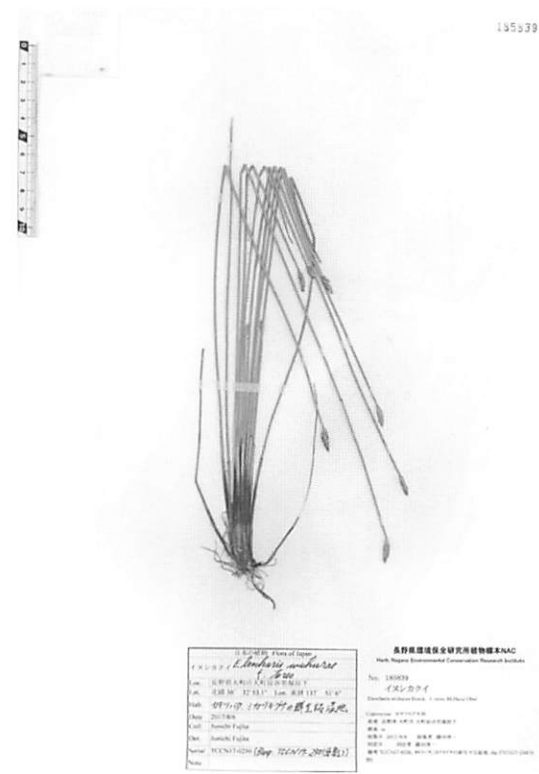


Fig.8 イヌシカクイ
Eleocharis wichurae f. *teres*

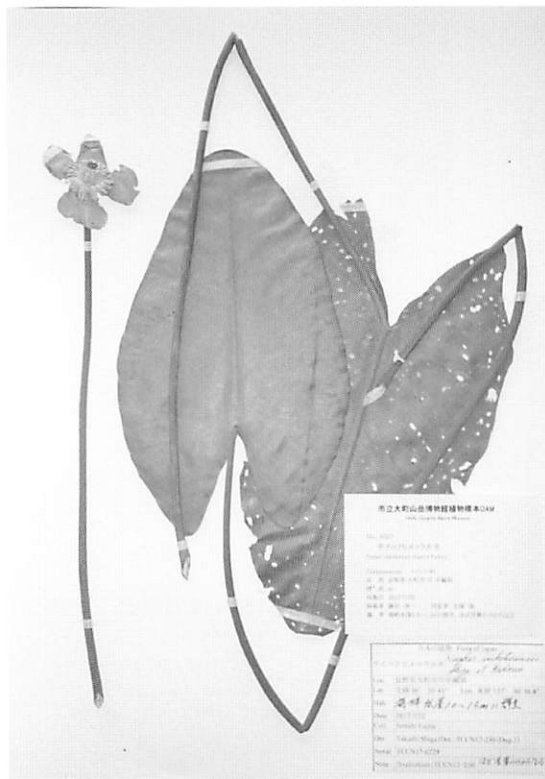


Fig.9 サイコクヒメコウホネ
Nuphar saikokuensis

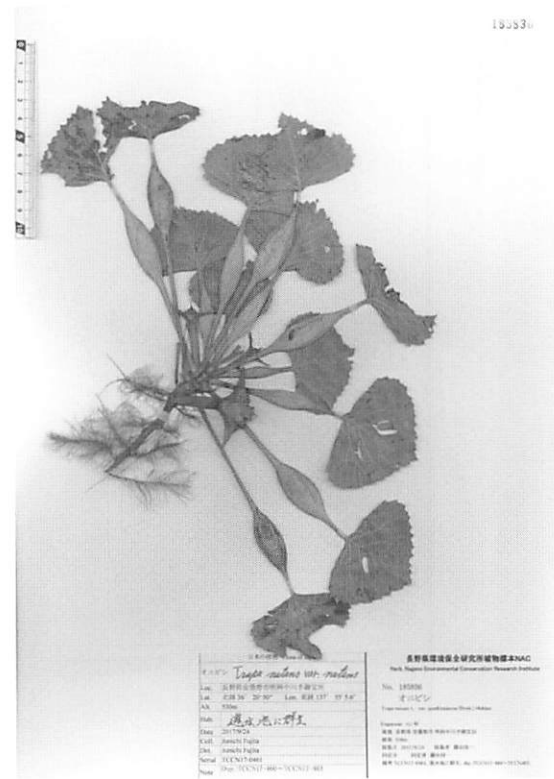


Fig.10 オニビシ
Trapa natans



Fig.11 シンテッポウユリ (タカサゴユリ)
Lilium × formolongo



Fig.12 シンテッポウユリ (タカサゴユリ)
Lilium × formolongo



Fig.13 ハイコウリンタンポポ
Pilosella officinarum



Fig.14 フトエバラモンギク
Tragopogon dubius



Fig.15 アリアケスマレ
Viola betonicifolia var. *albescens*



Fig.16 メンヤダケ
Pseudosasa × pleioblastoides

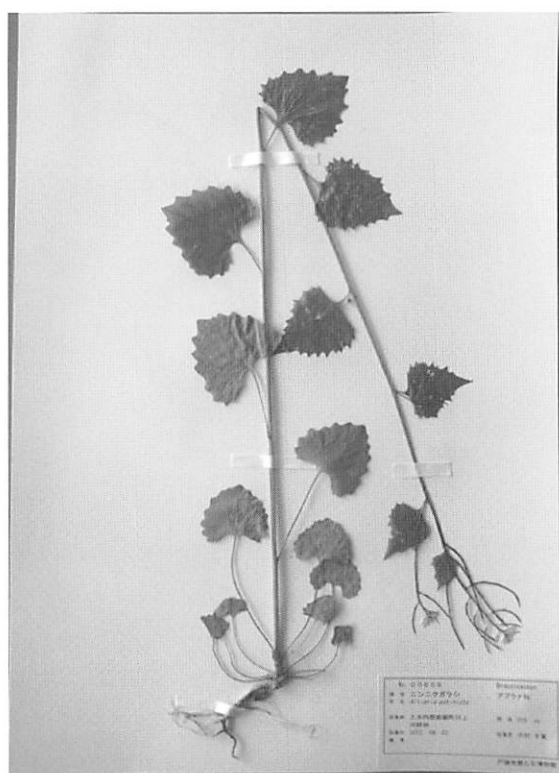


Fig.17 ニンニクガラシ
Alliaria petiolate



Fig.18 ミチバタナデシコ
Petrorhagia nanteuilii



Fig.19 ノラニンジン
Daucus carota

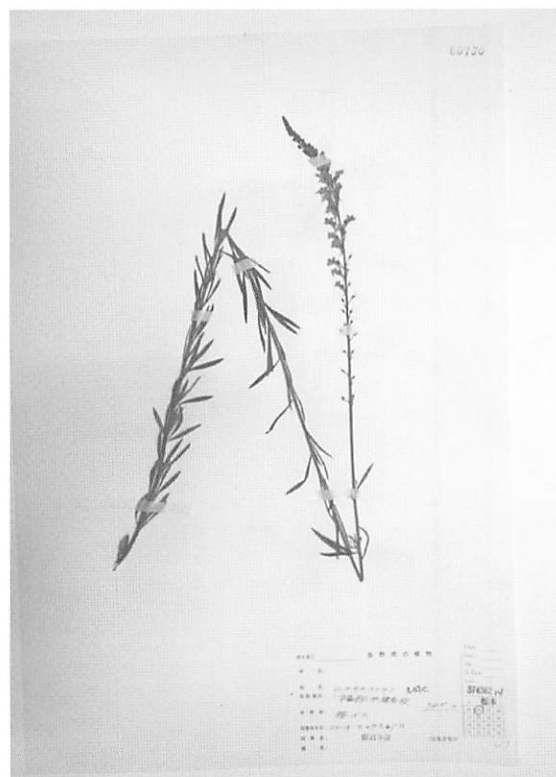


Fig.20 ムラサキウンラン
Linaria bipartite